

實  
驗  
國  
語  
讀  
本

尋常小學校用

卷五

檢定申請本

K120.8  
85b  
5

K120.8

85b

5

新編 國語讀本 卷五 目次

第一課 日の丸のはた  
第二課 四月三日  
第三課 水戸黄門  
第四課 大坂の陣

- 第五課 土中のけもの(一)
- 第六課 土中のけもの(二)
- 第七課 我が家の森
- 第八課 老僧ノツギ木
- 第九課 徳川家康の幼時
- 第十課 皇后陛下の御うた
- 第十一課 梅雨
- 第十二課 かひこの一生

一 三 五 六 七 九 十 十一 十三 十五



新編 國語讀本 卷五 目次

第十三課	ふしぎなゑふで (一)	十六
第十四課	ふしぎなゑふで (二)	十八
第十五課	ふしぎなゑふで (三)	十九
第十六課	海	二十
第十七課	ゑとき (三)	二十二
第十八課	さるのはし	二十三
第十九課	山びこの口まね	二十五
第二十課	富士のまきかり	二十七
第二十一課	尺ト升	二十八
第二十二課	商人	三十
第二十三課	のぞみある小僧	三十二

實験 國語讀本 卷五

第一課 日の丸のはた

帝國 國旗

日の丸のはたは、わが大日本帝國の國旗なり。きげんせつ、天長せつなどに、

いへくくののきにひるが、つれるさまは、まことにりつぱなるものなり。

世界の國々には、皆さだまりたる國旗

神皇正統記 卷之五 天武天皇 一

あり。されど、わが國の旗ほどいさましく、うるはしきはなし。

學業

われらはよく、學業をはげみて、わが國の名をあげ、此の旗のひかりを、世界に、かがやかさんことを、つとめずばあるべからず。

第二課 四月三日

天皇祭日

四月三日ハ、神武天皇ノ祭日ナリ。天

我皇ハ、我が國第一代ノ天皇ニマシマセリ。

天皇ハジメ、日向ニイマシテ、國ヲヲサ

メタマヘリ。其ノコロ、東ノ國々ニハ、ワ

民ルモノ、多クスミテ、民ヲ苦シメタリ。

軍 天皇、軍ヲヒキキテ、之ヲセイバツアラ

セラレ、ナガスネヒコナドノワルモノヲ、

寶國語寶 卷之五 三 古文官裁反

平

百歳



平ラゲテ、ツヒニ、天  
皇ノ位ニ、ツカセタマ  
ヘリ。

天皇御位ニマシマ  
スコト、七十六年、御年、  
百二十七歳ニシテ、カ  
クレマセリ。其ノ日

以

桃

黄

青

ハ、今ノ四月三日ニアタレルヨリ、後、此ノ  
日ヲ以テ、天皇ヲ祭ルコトトナレリ。

第三課 次郎のゑほん

次郎は、桃太郎のゑほんを買ひました。  
それには、いろどりがしてありませんか  
ら、いろをいれようと思つて、赤、黄、青の、ゑ  
のぐを買つて來ました。

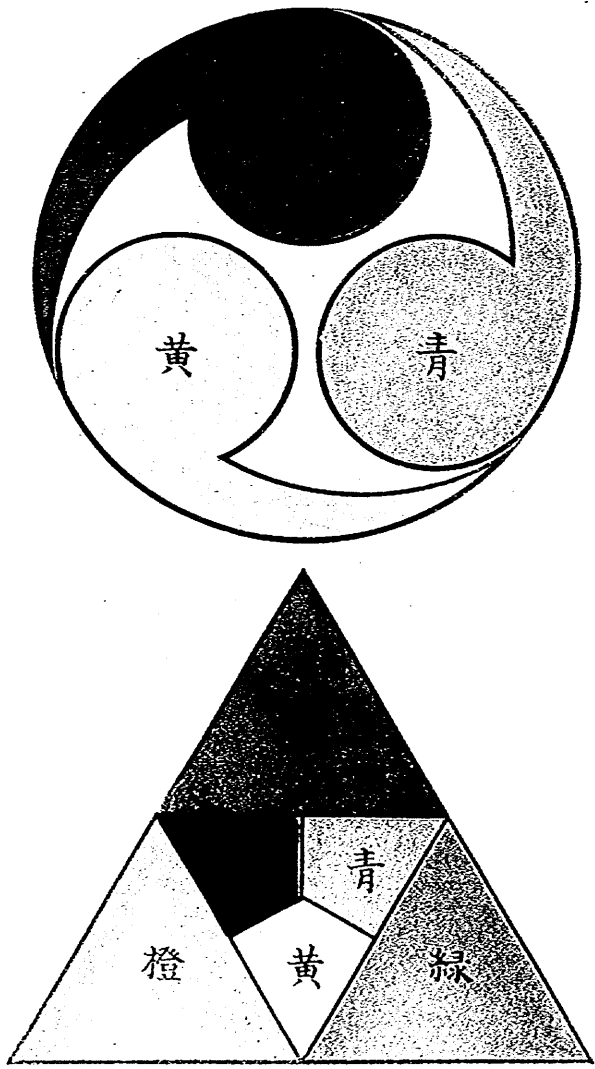
驗言言言才 老五 一 才又命非成

黄色にぬりました。

枚

そこで次郎は先づ、桃太郎を赤く、桃を  
それから一枚づつ、おけてゆきました  
が、青をつかふところがありません。次  
郎はいろ／＼かんがへてつひに、おにを青  
くぬりました。

次郎は其のほかの鬼もぬりたいと思



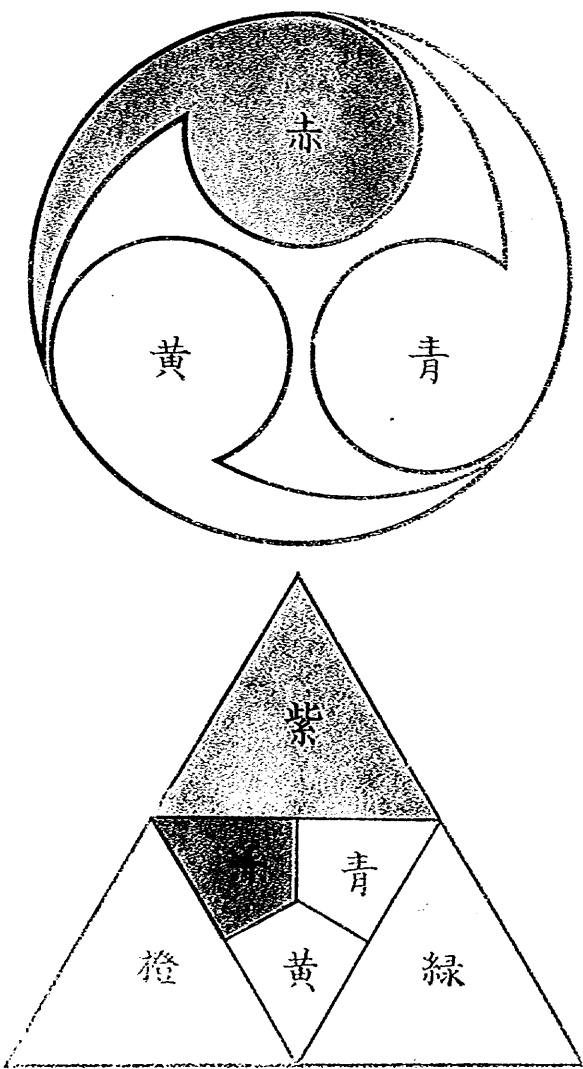
黄色

枚

そこで、次郎は先づ、桃太郎を赤く、桃を黄色にぬりました。

それから、一枚づつ、おけてゆきました。が、青をつかふところがありません。次郎はいろく、かんがへてつひに、おにを青くぬりました。

次郎は其のほかの鬼もぬりたいと思



ひましたが、かはつた色がありません。  
そこでおつかさんにたづねました。

おつかさんは、葱のぐを二いろづつ、ま  
せて御らんなさいといひました。

紫が、出来ました。其の色で、きじをぬり  
ました。



次ぎに、黄と青とをまぜますとみどり  
が出来ました。それで、きじのわきにあ  
る、木のはをぬりました。

知  
それから、次郎は黄と赤とをまぜて見  
ました。が、其の色の名がわかりません。  
そこで、又、おつかさんにきいて、だい  
色だといふことを知りました。今度は

それできびだんごをぬりました。

次郎は、此のよーに、さまざまの色で、桃  
太郎、さる、きじ、おに、たから物などをぬつ  
て、おつかさんに見せました。おつかさ  
んは、之を見て、うつくしいと、急、ほんが出来  
たとほめました。

第四課 太郎ノハタケ

種子

太郎ハ、ニハノスミニ、小サキ畠ハタケヲツク  
リテ、トーモロコシノ種子ヲマキタリ。



太郎ハ、毎朝、早く起  
キテ、水ヲカケタルニ、  
十日ホドタチテ、ヤウ  
ヤク、芽出デタリ。  
ソレヨリ、太郎ハ、マ

芽

見事

ス／＼、タノシミミテ、水ヲカケ、コヤシヲヤ  
リナドシテ、オコタルコトナシ。  
太郎ハ、ホネヲリノカヒアリテ、ヤガテ、  
多クノ見事ナルトーモロコシヲ、得ルナ  
ルベシ。

第五課 土中のけもの(一)

太郎は或る朝、早く起き出でて、トーモ

ろこしの畠タケを見まはりたるに、土中に在りて、土をもちあげぐるものあり。

太郎は父のもとに走りゆきて、之を告げ其の何たるかをたづねたり。

處

父は太郎にいふよ、それはもぐらもちといふものなり。つちにて、つよく、其のもちあげたる處をうたば、たやすく、之

告走

をとらふることを得べし。

太郎は、つちとぐはとを持ちて、いそぎ、其のところ<sup>を</sup>にいたれり。先づ、つちにて、もりあがれる處をうち、手ばやく、<sup>は</sup>を以て、ほり見たるに、もぐらもちは、半死半生のすがたになりて、其の中に、たふれ居たり。

半死

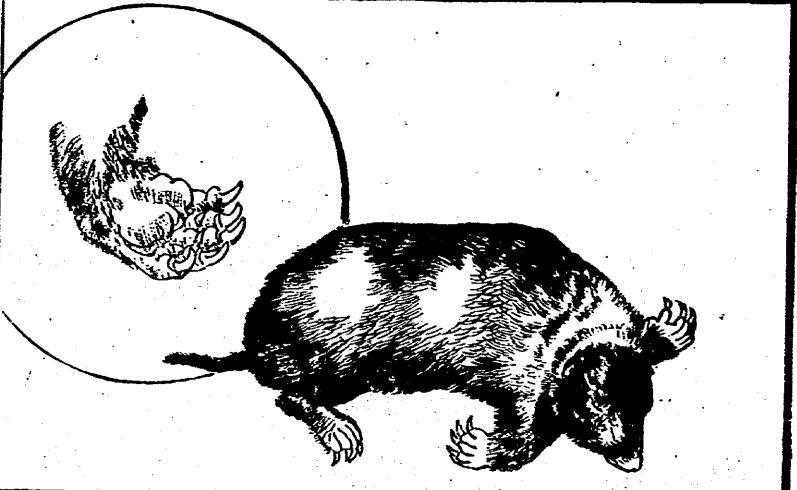
太郎はよろこびて、父のもとにたづさつ  
 ゆけり。父は、太郎のてぎはをほめ、めづ  
 らしきものなればとて、學校に持ち行か  
 しめたり。

第六課 土中のけもの(二)

教師

教師は、太郎の持ち來たれる、もぐらも  
 ちを見て、おもしろきけものを得たりと

通



て、多くの生徒をあつ  
 め、つぎの話をしたり。  
 これは、太郎さんの  
 いけどつた、もぐらも  
 ちであります。もぐ  
 らもちの毛は、此の通  
 り、びろーどりのよりに、

やはらかであります。

都合  
又、四本のあしと、口さきとは、土をほるに都合のよいよゝに、出来て居ります。

作物  
農家  
此のけものが、土の中を、もぐつてあるきますのは、ねきりむしなどを、食ふためであります。しかし、それがために、作物をからすことが多くありますから、農家

では皆、これをにくんで居ります。

第七課 我が家の森

森

我が家のうしろには、大なる森あり。

杉松

松、杉などの大木、多くしげり合へり。

其中、最も大なる一本の松は、みきのまはり、一丈にあまれり。

此の松は、今より二百年ばかり前に、我が

植 先祖の植ゑおかれたるものなりといひ  
つたふ。

共 其の後我が家は此の松と共に年々に  
子孫 至相 さらえ來たり子孫相つたへて今日に至  
れり。

我が家の者は此の松を見るたびに常  
に先祖のおんの大なるを思はぬはなし。

此の家に生まれたる者は此の松を先  
祖のかたみと思ひつとめて我が家のさ  
かえんことをはからざるべからず。

第八課 老僧ノツギ木

將軍 今ヨリ二百五十年バカリ前ノコトナ  
途中 途 將軍家光公タカガリノ途中ニテ  
古寺 一ノ古寺ニ立チヨラレシコトアリ。

老僧

其ノ時、八十歳バカリノ老僧、ニハニ出

デテ、ツギ木ヲシテ

居タリシガ、將軍ト

ハ知ラズシテ、礼ヲ

モセザリキ。

公之ヲ見テ、和尚ヲシヨ

何ヲナシ居ルカト、

礼



タツネラレタリ。老僧ハ見ムキモセズ、  
ツギ木スルナリト答フ。

公ハサラニ、「其ノ年ヲシテ、何ヲアテニ、  
ツギ木スルカト、イハレタリ。」

老僧ハ始メテ、フリムキ、今、ツギ木シテ  
オカバ、後ノ代ニハ、大木トナラン。我レ  
ハ、寺ノ爲メヲ思フナリ。己レ一身ノ爲

己爲

身 感

メヲハカルニハアラズト答へタリ。  
公ハイタク其ノ心ガケニ感ジテ多ク  
物ヲタマヒタリトイフ。

第九課 徳川家康の幼時

徳川家康は、今より三百年ばかり前の  
人なりき。幼き時、供の者に負はれて、子供  
の石がつせんを見たることありき。

人 數

其の人数、一方は少なくして、一方は多  
かりしが、家康は、其の少なきかた、かつべ  
しといへり。

供の者、あやしみて、其のわけをたづね  
たり。家康之に答へて、「多き方は、多きを  
たのみて、はたらかず。少なき方は、少な  
きを知るが故に、力を合はせて、たゝかふ  
故



勝  
 によるなり」といひたるに、はたして少な  
 き方の勝となれ  
 り

家康はかく妨  
 き時より、ちゑ人  
 にすぐれたりし  
 が後多くのたゝ



政  
 かひに勝ちて、つひに、天下の政をとるに  
 至れり。

第十課 皇后陛下の御うた

コン  
 ゴー  
 セキ  
 金剛石も、みがかずば、

玉のひかりは、そはざらん。

人も學びて、後にこそ、

まことの徳は、あらはるれ。

徳

時計の針のたえ間なく、

めぐるがごとく、時の間の、

日かげをしてみても、はげみなば、

いかなる業も成らざらん。

第十一課 梅雨

雨

雨は十日ほど前より、ふりつづきて、今日もなほやむべきもよーなし。

今はあそびの時間なり。されど、生徒

等は外に出でて、あそぶことも出来ざれ

ばとて、教師は種々のおもしろき話をき

かせたり。

話すみて後、小山太郎は、教師にむかひ

頃て、いつ頃此の雨がはれませうかと、たづ

ねたり。

教師はよき問なりとて、生徒等にむかひ次ぎの話をなせり。

今は梅雨といつて、一年の中で、一ばん雨の多い時節であります。梅雨は、毎年、六月十日頃に始まつて、凡そ、一月位つづくものであります。

其の間は、大てい、雨がふりますから、し

時節

凡

着具

天氣

めりけが多くて、着物や、道具などがよくかびるものであります。

もう、六月のすゑでありますから、まもなく、またよい天氣になりますせう。

第十二課 かひこの一生

蠶カビコは、初めたまごよりかへりくはを食ひて、成長するものなり。かへりて後、凡

回 眠 皮

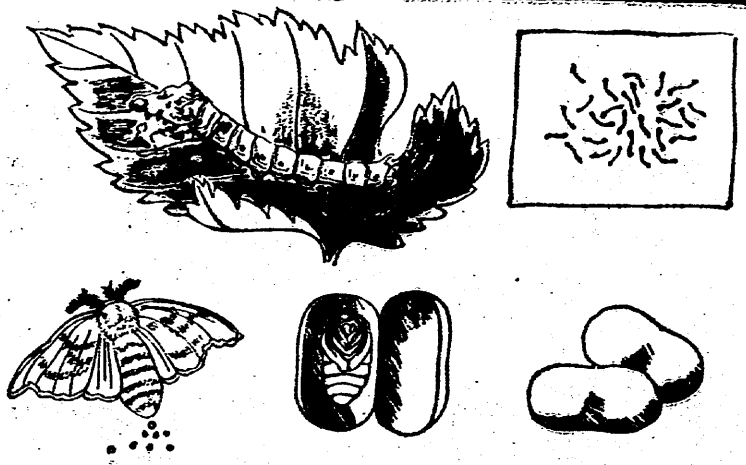
桑

之、四十日にして、まゆをつくる。

其の間、くはを食ふことをやめて、うご  
かざること四回あり。之を、蠶の四眠とい  
ふ

蠶は、一たびぬむるごとにふるき皮を  
ぬぐ。四眠さめて後、七日ほどをすぐれ  
ば、また桑を食ふことをやめ、糸をはきて、

町



まゆをつくる。

一つのまゆの糸は、

其の長さ、大凡、五町ほ

どありといふ。まゆを

つくりたる後、又ふる

き皮をぬぎ、形をかへ

て、さなぎとなる。さ

卵

なぎは十二三日にして、ひるとなり、まゆをやぶり、出でて卵を生む。

第十三課 ふしぎな鳥ふで (一)

昔、一人の鳥しが居りました。まづしくはありましたが、鳥をかくことは、なかなか上手でありました。

或る日、此の鳥しのところに、一人のぼ

頼

ーさんが来て、自分のにかほを、かいてくれと頼みました。鳥しは、心よくひきうけて、すぐにかいてやりました。

喜

ぼーさんは、それを見て、大それ、喜びました。が、礼をする金がないのに、困りました。

困

そこで、ていねいに、其のわけをはなし

筆で、礼のかはりに、一本の古い名筆をやり  
ました。

其れは、ただの筆ではありません。そ  
れで、名をかいて、三度、手をうつと、其の名  
が皆、ほんとのものに成り、又、手を三度  
うつと、もとの名にかつるといふ、不思議  
な名筆でありました。

不思議

第十四課 ふしぎな名筆 (三)

其の後、名しは、あるおやしきに、よばれ  
ました。

早速

何事かと思つて、早速、おやしきにゆきま  
した。主人は、「やしきに在る、たくさんの  
たから物を一目に見ることの出来るよ  
しにかいてくれ」と御頼みになりました。

主人

急しは、すぐにとりかゝつて、五六日の  
中にかき上げました。主人は、其の急の  
大それよく出来たのを、ごらんになつて  
「代をいくらつかはさう」とおたづねにな  
りました。

百圓

急しは「おそれながら、百圓いただきた  
うござります」と答へますと、主人は、おど

承知

ろいて「とほーもない事をいふ一圓位に、  
まけるといはれました。

急しはなかく、承知いたしません。

主人は、おこつて、つひに急しを、ろーやに入  
れました。

悲

急しは、ろーやの中で、悲しんで居まし

第十五課 ふしぎな急ふで (三)

たがある日、ろーやの番人に頼んで、いつ  
ぞや、もらつた、名筆を取りよせました。  
それから、主人のたから物を、大きくか  
いて、手を、三度うちますと、それが、皆、ほん  
とーのものになりました。

申  
番人は、びつくりして、其の事を、主人に  
申し上げますと、主人が、すぐに、ごらん

なつて、ゆるしてやるから、おれのたから  
物と取りかへよといはれました。

ゑしは、おほせにしたがつて、主人のた  
から物ととりかへました。それから、か  
へつて、手を、三度うちました。

主人は、大きなたから物を得て、喜んで  
居られました。が、いつの間にか、ゑになつ



求  
てしまひました。主人は、自分から求め  
た、わざはひでありますから、どうするこ  
とも出来ないで、大そ、後悔したといふ  
ことであります。

第十六課 海

河  
河ノ水ハヨルトナク、ヒルトナク、常ニ  
ナガレテ、ヤム時ナシ。其ノ水ハ、ツヒニ、ナ

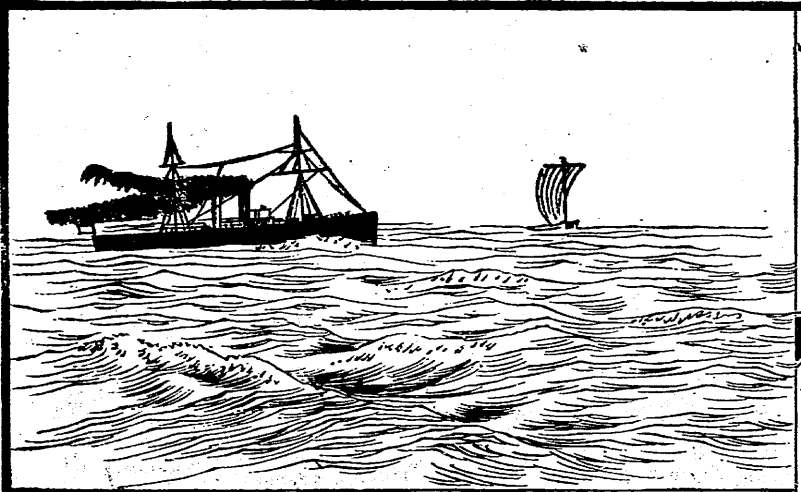
ガレ入ルトコロハ、海ナリ。

海 廣 千

海ハ、ヒロク、大ナルモノニシテ、其ノ廣  
サトホク、數千里ニ、ワタレルトコロアリ。  
其ノフカサモ、二三里ニアマレルトコロ  
アリ。

水面  
風ナク、ハレタル日ニ、海ベニ行カバ、カ  
ガミノ如キ水面ハ、テナクツヅキテ、帆船<sup>ホブネ</sup>

船



汽船<sup>キセン</sup>ナドノ、其ノ上ニ、  
ユキ、スルヲ、見ルベ  
シ。サレド、大風、一  
夕、起コル時ハ、山ノ如  
キ、オホナミグツレ來  
タリテ、或ハ、船ヲクツ  
ガヘシ、或ハ、家ヲモナ

ガスベシ。

大波

海ノ面ニハ、タダ、大波小波ノ、ウチヨス

ルノミナレドモ、其ノ中ニハ、鯨<sup>クジラ</sup>ノ如キ、大

動物

ナル動物アリ。又、鯛<sup>タイ</sup>、マグロ、鰯<sup>イサナ</sup>ナドノ魚

獸類

類ヲ始メトシ、獸類、及ビ、貝類ナド、多クス

ニ、海苔<sup>リコウ</sup>、昆布<sup>コンブ</sup>、ナドノ海草モ、マタ、生ヒシ

ケレリ。

第十七課 魚とき(三)

こゝに魚がけるは、魚類なり。一は鯛、  
 二はひらめ、三は鰯、四はまぐろ、五はさけ  
 にして、六は鯉、七はふな、八はうなぎなり。  
 此の中、鯛、ひらめ、鰯、まぐろは海にすみ、  
 鯉、ふな、うなぎは多く川にすむものなり。  
 たださけは、時節によりて、海にすむこと



あり、又、川にすむこと  
 あり。  
 魚類の、海にすめる  
 ものを、海魚といひ、川  
 にすめるものを、川魚  
 といふ。  
 魚類には、其の形、大

尾 小種々あれども皆ひれと尾とありて、よく水中をおよぐ。又、うきぶくろを具へて

自由 自由にうきしづみす。

第十八課 さるのはし

猿サルには、多くの種類がありますが、其の中に、をなが猿といふものがあります。

橋

此の猿が、谷川をわたるときは、猿橋と

いふものを、こしらへることがあるさうであります。

先づ、かしら立つた猿が、一方の、きしの木に、高くのぼつて、尾を、枝にからみつけ、それから、二番目の猿の尾をつかみます。二番目の猿は、また、三番目の猿の尾をつかみます。

さういふふうにして、むかうのきしに、とどくよーになるまで、つながります。さうなるとい

終ちばん終はりの猿

がはずみをつけて、むかうの、きしの木に、



とびつきます。

終はりの猿が、はじめの猿と同じ高さのところまで、のぼりますと、こゝに、始めて、猿の橋が出来あがります。

そこで、ほかの猿どもが、皆、其の橋をおたっしてしまひますと、今度は、はじめの猿が、からみつけた尾を、はなします。

殘 さうして、多くの猿が、残らず、むかうの  
移 きしに、移ることが出来ます。なんと、お  
もしろい仕方では、ありませんか。

第十九課 山びこの口まね

孝 ある日、孝一の父は、草をからんとて、山  
急用 に行けり。間もなく、家に、急用起こりた  
れば、孝一は、父をよび來たらんとて、弟の

忠 忠二と共に家を出でたり。

二人はやがて、山に入りて、あちらこち  
らな、さがしたれども、父を見出だすこと  
能 はざりき。

孝一は、心せくまゝに、こゑ高く、「おとつ  
さん」と呼びたり。其の時むかうの林の中  
にも、又「おとつさん」と呼ぶものありたり。

氣味

二人は氣味わるく思ひたれどもなほ  
もしきりに呼びて、すみゆく中に、やう  
やく、父の答をきく得たり。

二人は大に喜び、急ぎ父のもとに走りゆ  
きて、用事を告げ、又途中にて、われ等のこ  
ゑをまねて、「おとつさん」と呼ぶものあり  
たるよしを語りたり。

語

汝等

父は、「それは山びこといふものにて、汝  
等のこゑがむかうの山にあたり、すぐに  
はねかへりて、又汝等の耳に入るものな  
り」といひたり。二人は始めて、其のわけ  
をさとり、父と共に家にかへりたり。

第二十課 富士のまきがり

源頼朝ミナモトノヨリトモは今より六百年ばかり前の人

なり。或る時、富士のすそのに、まきがり  
せしことありき。

これにしたがへる人々はおのく先き  
を、あらそひて、おほくのけものをうち  
とれり。

たまく、一匹の猪イノシシあらはれ出でたり。  
人々は、我れうちとめんと、きをひよれり。

猪は、物ともせず、或  
は、きばにかけ、或は、  
ふみたふして、くる  
ひまはれり。  
今は、其のいきほ  
ひに、おそれて、近づ  
く者も、なくなりたり。





新 新田四郎忠常之を見て、直ちに、すゝみ  
 折 出で、猪にキシぎりつけたるに、刀折れたり。よ  
 りて、猪の尾をつかみて、其のせにとびの  
 横腹 り、短刀を以て、其の横腹をつきとほしぬ。  
 猪は、其のまゝたふれ、忠常のてから、第一  
 と、ほめられたり。

第二十一課 尺ト升

物ノ長サヲハカルニハ、モノサシヲ用  
 フ。  
 尺 衣服 尺  
 織物 服 織物 ナドヲハカルニハ、大テイ、クセラ鯨尺ヲ  
 材木 他 他 材木 及ビ、其ノ他ノモノヲハカ  
 ルニハ、曲尺ヲ用フ。  
 尺 物 ノサシハ、凡テ、尺ヲモト、シ、一尺ヲ

倍

十分シタルヲ、一寸トイヒ、一寸ヲ十分シタルヲ、一分トイフ。又一尺ヲ十倍シタルヲ、一丈トイフ。

醬油酒

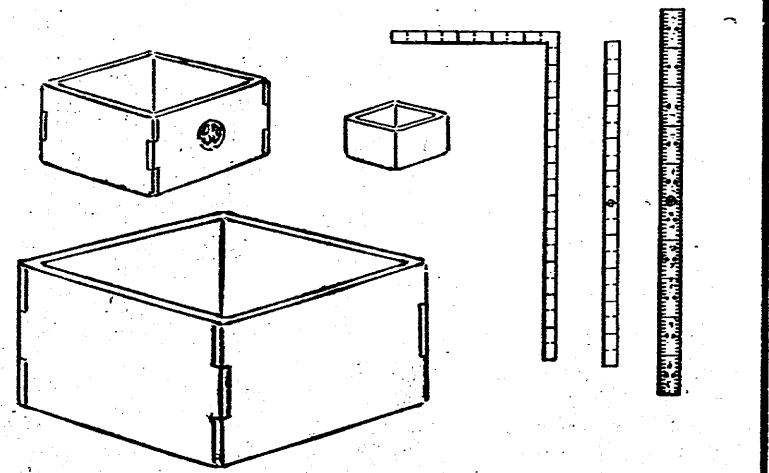
コク物、酒、醬油ナドノ、カサヲハカルニハ、マスヲ用フ。

升

マスニハ、一合マス、五合マス、一升マス、一斗マスナドアリ。

勺

斗



マスハ、升ヲモトトシ、一升ヲ十分シタルヲ、一合トイヒ、一合ヲ十分シタルヲ、一勺トイフ。

又、一升ヲ十倍シタルヲ、一斗トイヒ、一斗

ヲ十倍シタルヲ、一石下イフ。

第二十二課 商人

品

商人は人から品物を仕入れて、それをほかの人に、賣りさばくことを業とするものであります。

利益

それ故、自分の利益をはかるばかりでなく、廣く、人の便利になるよーに心がけ

便利

ねばなりません。

糶

もし、目の前の利益にばかり、心をとられて、粗末な品を高く賣りつけ、又、あるい物をよい物のよーに見せかけて、賣りなごしますと、直ぐに、其のひよーばんが、わるくなります。

ただひよーばんが、わるくなるばかり

ではありません。人の道にもかけますから、しぜん世間からも、つまはじきされるよーになるものであります。

相當  
信用  
さうでありますから、商人は平生、正直にして、相當のねだんで、正しい品を賣ることを心がけねばなりません。さうすると、しぜん、世間の信用を受けて、商賣

がはんじょーするよーになるものであります。

第二十三課のぞみある小僧

ある商家にて、一人の小僧をやとひ入れんとせしことありき。主人は多くのぞみての中より、最も年少なき子供をえらび用ひたり。

店の者、あやしみて、其のわけをたづねたり。主人は、之に答へて、

彼 室

彼の子は、初め、我が家に來たりし時、先づ、店先にて、足のほこりをはらひしづかに、戸をあけて、室に入れり。

他の子供等は、早く、わが問に答へんとて、先をあらそひて、おし合ふ中に、彼れ

は、しづかに、己が番の來たるを待てり。我が前に出でたる時は、立居、ふるまひしと、やかにて、ことばづかひもまた、正しかりき。

見込 示

是等は、彼れが、他日、りつばなる商人となるべきことを示せり。我れは、多く、問ふことなくして、ゆくすゑ、見込ある

K120,8

明治四十九年二月十六日  
文部省檢定濟  
尋常小學校國語科用教科書



發行所

東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地  
合資會社  
教育書院  
(電話浪花一三三番)

著作權者 右文館編輯所  
發行者兼印刷者 東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地  
代表者 加藤初太郎  
教育書院

明治三十四年七月廿九日印刷  
同 年八月十一日發行  
同 年九月十六日訂正再版印刷  
同 年九月十九日訂正再版發行  
同 年三月廿六日印刷  
同 年三月廿九日發行

定價表	
卷一	金八錢
卷二	金九錢
卷三	金拾錢
卷四	金拾錢
卷五	金拾壹錢
卷六	金拾貳錢
卷七	金拾參錢
卷八	金拾參錢

實験  
國語讀本卷五終

子供なるを、知りたるなりといひたり  
とぞ。

國語讀本卷五終

